合わせ鏡

立原正秋

合わせ鏡　　定価　1200円

昭和55年10月10日　発行

書籍コード　0093
056701
2265

著　者　立原正秋
発行者　深見兵吉

本文印刷　八光印刷
カバー印刷　大平舎美術印刷
製本　今泉誠文社

発行所　光風社出版

〒112 東京都文京区関口1-32-4
電話(03)204-2441　振替東京8-12913

落丁・乱丁などの不良本はお取り替えいたします

作品集

合わせ鏡

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

合わせ鏡　五
刃物　七
赤煉瓦の家　一五一
競馬　二〇七

裝幀　司修

合わせ鏡

一

南風ホテルの前で綾子と別れたとき、知也は、綾子の熱っぽいまなざしに女を見た。ああ、俺は、女のこんな目に何度か出逢っているが。……はじめて男を識った女の目は可憐であったが、綾子の目はそうではなかった。はじめて男を識った綾子があんな目を俺に向けた、あれはなんだろう？

「しかし、所詮はつまらんことだ」

知也は、藤沢駅にむかう車の窓から、移り行く七里ヶ浜の海岸線を眺め、だるそうに呟いた。

「なにがつまらないの」

藤子がきいた。

「いや、こっちのことだ」

「きれいな娘さんじゃないの。なにか暗い感じがしたけど、男を惹きつける目をしていたわ」

知也はそれには答えず、ハンドルを握っている藤子の手を見ていた。この女ともいいかげんのところで手を切らねば。冬からそんなことを考えながら、いまだに切れずにいたが、鎌倉から去ることで、なんとか別れられるかも知れなかった。

「あなた、いつあの娘に手をつけたの？」

「知っていたのか」
「そりゃ判るわ」
「出戻り女というのは目がたしかなんだな」
「あの娘の目を見れば判るわ。でも、まあ、いいわ。一週間したら藤枝に行くわ。でも、藤枝市長楽寺とだけじゃ判らないわ。番地があるでしょうに」
「番地はあるだろうが、知らないんだ。小川のところには、長楽寺と書いただけでいつも手紙は届いている」
「無責任な言いかたね」
「ほんとに来るつもりかい？」
「行くわよ」
「なにしに来るんだ？　俺と寝るためにか？　それなら東京で適当な奴をつかまえればよさそうなものだが」
「そんなに器用に感情の切りかえが出来ると思っているの？　あたしを馬鹿にしているのね。長楽寺というのは町名なの？」
「そうらしい」
「らしい、だなんて、あなた、行ったことがあるでしょうに」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「二度しか行っていないよ」
「今夜はどうするの。やはり箱根には行かないの？」
「だめだ、明日はばあやがくるから。はじめての家に主人がいないなんて、よくないよ。ばあやも、独りで切りもりしているから、なにかとたいへんなんだ」
「あのばあや、変に色っぽいわ。……じゃあ、一週間すぎたら行くわ」
知也は、片瀬をすぎるあたりで目を閉じ、俺は、この女に藤枝くんだりまで追いかけられるいわれはない、と思った。家を売って鎌倉から去る気になったのは、生活を建てなおしたい、という思いが心の裡のどこかに潜んでいたからである。越す先はどこでもよかった。彼の裡に棲みついている鎌倉は、淀み果てて死んだ街であった。酒を飲み女と遊びくらしているうちに、いつしか三十歳を過ぎていた。鎌倉の街は、どこを歩いても、過去の無頼な生活の残骸が目につき、ああ、いやな街だ、と思うときがあった。刺戟をもとめ、そこに浸っているうちはよかったが、麻痺してくると、だんだん倦怠が身についてきて、辛い日が続いた。倦怠に耐えるのはなにより辛かった。辛さを通りこすと怖さを感じた。その怖さは、俺はこうしているうちに、しまいには自殺するのではないか、という思いに繋がっていた。
しかし、綾子に手をつけたのは間ちがいであった、と知也はにがい思いに落ちて行った。南風ホテルに別れを言いにきた綾子から、

「わたし、あなたを愛してしまったんです。目をあけてこちらを見てください」
と言われたとき、知也は、危く自分が蘇生できると勘ちがいした。綾子の態度には、凛としたものがあった。己に克ってきた一人の若い女の激しい情念に直面した彼は、目を閉じたまま、つまらんことだ、と答えながら、自分の裡に絶望を見たが、あのときの絶望は、もしかしたら綾子と俺は兄妹かも知れない、という思いからきていたのではないか。
知也は、藤枝に借りた家を見たわけではない。近くに手頃な空家があったから借りておいた、との小川の手紙で、それでは越そうか、と決めてしまったのである。棲む場所が変れば、倦怠から脱出して転身できるだけの強い対象が見つかるだろうか、それは判らなかった。はっきりしているのは、綾子が藤枝に来るだろう、ということだった。
「藤枝に行くのは、すこし遅れるかもわからないわ。新しいスーツが出来あがってからにするわ」
藤子が言った。
「もっとおそい方がいいよ。なんなら、ずうっと来なくともよい」
「それ、どういう意味？」
「意味なんてないよ。男と女は、いったん出来てしまうと、殆どの場合、徹底的に相手を識りつくそうとするものらしい。おまえさんも御多分にもれず、そんな女になりかかっているらしいな。しかし、俺はもういやだよ。これ以上疲れるのはごめんだ」

「あたしがいやになってきたの？」
「女という動物がいやになったのさ」
「女がいやになったなんて、そんな見えすいた嘘をいうものではないわ。あなたのような面喰いの色好みが、いまさらそんなことを言っても、誰も信用しやしないわ」
知也は返事をせず、この女はどの部類に入るだろうか、とかかわりあった女の顔をひとりひとり想いかえしてみた。こんな風に女を識別したことはなかったが、藤子は、有閑無職階級の空虚退屈な生活を送っている女であった。すくなくとも一年ほど前までは、男遊びを消閑の余技に数えていた女であった。
知也は、一度だけ藤子の寝室に泊ったことがある。出戻りでも、野上家では子供は藤子ひとりだったから、勝手気儘な贅沢が許されていた。
寝室には、北側の壁に嵌めこみ鏡があった。そこに、反対側においてある三面鏡が反射し、三面鏡の横の台においてある宝石や真珠の光が氾濫し、すべすべした贅沢な調度品には香料のにおいが滲みつき、性的遊戯に耽るにはこれ以上の場所はない、そんな部屋であった。
そこに男をひきこみ消閑の余技にしていた頃はよかったが、いつしか盛りを過ぎた自分を意識しはじめ、知也にたいして微妙な変化を見せはじめたのである。
最近はたいがい鎌倉の南風ホテルで一夜をともにしたが、藤子は、骨を灼く激しい求めかたをし

た後は、乱れ髪のまま死んだように睡った。知也はそんな藤子の寝顔を見おろし、生きながらの死を見た思いをした。俺もこの女と同じだろう、と彼はよく起きぬけに鏡に自分の顔を映してみた。いつも、すっかり皮膚が死に、疲れが溜った顔であった。

しかしまだ充分見られる女であった。三十五歳にしてはしなやかな軀で、硬い太腿と細い脚、くびれた胴に厚みのある腰、丸く突きでたかたちのよい尻、太り肉と感じられるほどの豊饒な乳房があり、全体に筋肉質の軀であった。

「あたし、やはり、一週間したら行くわ」

藤沢駅前で車から降りたとき藤子が言った。知也はこのときどうしたわけか、陰翳の深い綾子の性格を想いかえしていた。

東海道線の下り電車がつくまで間があったので、知也は藤子をつれて裏通りの喫茶店に行った。小田原まで普通の電車に乗り、そこから準急に乗りかえればよかった。

「あの娘、きっと、藤枝に行くわよ。さっきホテルの前であたしを視つめる目が尋常ではなかったわ」

藤子は、喫茶店に入って席につくなり言った。駐車場からここに歩いてくる道々、ずうっと考えていた、という風な言いかただった。

「なぜそんなに気にするんだね」

「気になどしていないわ」
「それなら、あの娘にはかまわない方がいいな」
「そうはいかないわ」
「気の毒な娘なんだ」
「そんなことは問題外よ」
そうかも知れない、年齢や境遇の差などは、女にしてみれば問題外かもしれない、と知也は白いレース越しの窓外を見た。道を隔てたむこう側には、葉の出そろった銀杏並木があり、その向うの石垣には初夏の陽が射していた。
このとき彼は、綾子が来るのを待っている自分の心の裡をみた。やはり不気味だった。血の繋がりを考えると、ひどいいたずらだ、と思わないわけにはいかなかった。しかし、ほんとに綾子と俺は異母兄妹だろうか？　しかし、もう、取りかえしはつかなかった。

二

綾子は、南風ホテルの前で知也と藤子の車を見送ると、苦しみに苛まれはじめた。いままでは、この鎌倉のどこかに知也がいる、という事実に安堵していた面があったが、藤枝に去ってしまった、

それも有閑女といっしょにわたしの目の前から去ってしまった、という事実はやはり苦しかった。

綾子は南風ホテルの庭をでると海岸道路に歩いた。そして、そこから、ぎらぎら光っている砂浜を見おろし、やがてその光が自分の内部を照らしてくるのを見たとき、なるべく早く藤枝に行こう、と思った。

それから綾子は海岸道路を再び材木座まで歩いた。ばあやから、藤枝の住所をききだすためであった。

ばあやはまだ後かたづけをしていた。

「昨日からやっているので、もうだいたいおしまいですが、綾子さん、知也さんにおあいになりましたか？」

ばあやは三人の若い男に休むよう命じると、縁側に腰をおろしながら綾子を見てきいた。

「ええ。……野上藤子さんとごいっしょに車でホテルを出て行かれました」

「いったい、どういうおつもりなんでしょうかね。この家は売ってしまうし、それも綾子さん、早く売るために、時価より三割も廉(やす)く手放したんですよ」

「それで……ばあやも藤枝に行くの？」

「ええ、参ります。私がいないことには、なにひとつ出来ない方なんですからね」

「今日これから行くの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com